

令和4年度 学校評価

【教育の基本方針】(尼崎市教育振興基本計画)

- 1 未来志向の教育
- 2 個の尊厳や人権の尊重
- 3 家庭・地域社会との連携(子どもの視点に立った教育)

[各校の重点取組について]	(1)目標や希望を持ち、学び続ける意欲・態度を育てる	(2)豊かな心を育む、いじめ防止
	(3)基本的な生活習慣を身につける	(4)信頼される学校づくりを行う
	(5)部活動を支援する	(6)勤務時間の適正化を推進する

学校評価の観点

<b>1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力の育成と健やかな体づくりに取り組む</b> (1) 授業改善の取組を促進するとともに、客観的なデータを踏まえた確かな学力の保証及び縦のつながりを重視した校種間の連携に努める (2) 障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ、様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となる特別支援教育の取組を充実させる (3) 食育を通して生活改善の取組を促進し、健全な心と身体を培い、豊かな人間性の育成を図る (4) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る (5) 積極的にICTを活用し、情報活用能力の育成を図る	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3	3
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究授業や指導案作成など、教職員が協力し資質向上に向けて取り組んでいる。</li> <li>・小テストや宿題点検などに、よく取り組んでいる。</li> <li>・ICT機器を活用し、授業内だけでなくタブレット端末を家庭で活用するよう取り組んでいる。</li> <li>・特別支援学級の生徒が交流学習する際に補助の先生をつけ、交流学習の充実につとめている。</li> <li>・トライやる・ウィークを実施できた。</li> <li>・あまこステップアップ調査結果を分析し、指導に活かしている。</li> <li>・人権講演会や掲示物などで、生徒が多様な生き方について考える機会をつくっている。</li> <li>・多様な教育的ニーズに対応するため、通級指導教室、別室指導を開設し活用している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研修等で得た事柄を授業の中で活かすことができた。また、全体的に学力が伸びた。</li> <li>・生徒の使用頻度が高くなったことによりコンピュータ技能の向上が見られた。</li> <li>・特別支援学級の生徒が交流に行く意欲は出てきている。交流学習での実技教科の作品を最後まで仕上げることができるようになった。</li> <li>・生徒たちがICT機器活用に慣れてきた。</li> <li>・事業所で体験活動ができ、キャリア教育が推進できた。学区内の施設や店だけではなく、市外や県外へも生徒自身で見つけ新しい事業所で体験ができた。</li> <li>・人権講演会については、多くの生徒たちが他者に関心を持つことの大切さに気付くことができた。</li> <li>・通級指導教室、別室指導を活用し、登校できる生徒が増加した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員に教材研究や生徒と接する時間的の確保が必要である。</li> <li>・教職員数の減少に伴い、持ち時間数の関係で補助にすることが可能な人数が少なくなる。</li> <li>・教材研究をおこなう時間を増やすことができるよう校務分掌の整理が必要である。教師、生徒とも時間の余裕が望まれる。</li> <li>・まだまだ教職員の中でのICT活用スキルに差がある。ICT教育について分掌をあげて学校全体で取り組んでいく必要がある。書く能力の不足している。</li> <li>・食育については、栄養教諭を活用し、計画的に取り組む必要がある。</li> </ul>

<b>2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る</b> (1) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (2) 道徳性育成の取組を促進し、多様性を受容し、思いやりに満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (3) 各校のいじめ防止基本方針に基づき、誰もが安全・安心して過ごすことができる学校の環境づくりに努める (4) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成を図る (5) 不登校にならないようにするための学校づくりを進めるとともに、不登校児童生徒の学習環境の確保や家庭への支援に努める	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3	3
取組	成果	課題と改善策
<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャリア教育に取り組んでいる。</li> <li>・重大事案発生後、SC.SSWや講演会を実施し、関係機関との連携を強化した。</li> <li>・いじめアンケートを行い、課題のある生徒に対して、いじめ対策チームを中心に早急に対応し連携を図った。</li> <li>・支援が必要な生徒についてケース会議を行い、教科担当と特別支援学級担任、通級指導担任で情報交換を行い、生徒の共通理解に努めた。</li> <li>・カウンセリング、教育相談等による生徒からの聞き取りや相談を行った。</li> <li>・不登校生徒の学習保障としてスタディーサブ(オンライン無料授業)のアカウント発行を行い、学習環境を整備した。</li> <li>・ノーチャイム週間や美化週間などを行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒たちが広い視野に立ち、日本だけではなく、世界全体を考える力が、少しずつ身につけてきている。</li> <li>・生徒にかかわる教職員が同じ姿勢で対応することで、いじめの早期発見及び、生徒の気持ちを安定させ、少しづつであるが情緒が安定して、落ち着いた学校生活を送ることができるようになった。</li> <li>・生徒がタブレットをよく活用するようになった。</li> <li>・生徒が望ましい生活習慣について自分たちで考えるようになった。</li> <li>・別室体制が充実し、生き生きと登校する姿が見られる。</li> <li>・生徒たちの人間関係をはじめとする様々な悩みなどを理解し少しでも解決することができた。</li> <li>・生徒たちが学年の先生全員と道徳を学ぶことで多様性を受容できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本校における別室の人数も増加している。不登校になりそうな生徒をいち早く見つけ、未然に支援することが本校の課題と言える。また、社会的自立につなげるためにも、別室独自のレクリエーションなどの取り組みを考える必要がある。通級指導教室との連携も課題である。</li> <li>・給食の導入で、放課後の時間が少なくなり、会議も多いため、ケース会議の時間の確保が課題である。また、生徒たちと向き合う時間がさらに必要と考える。</li> <li>・教員数が減少していく中、現状の取り組みをどう継続していくかが課題である。</li> </ul>

<b>3 家庭・地域・学校の連携を深め、活力に満ちた学校園づくりに取り組む</b>		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		2.5	2
(1) 教職員の資質向上の取組を促進し、業務改善を進めながら学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 学校と地域との連携・協働を推進し、地域とともにある学校づくりに努める			
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> <li>欠席者への電話連絡、長欠生徒への家庭訪問など積極的に保護者との良好な関係築いている。</li> <li>トライやる・ウィークで地域の事業所と連携を図った。</li> <li>地域総合センター上ノ島と連携し、関係機関とカンファレンスを実施したり、共同事業を考えた。</li> <li>学校行事の保護者参加を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>別室、特別支援学級へのお試し入級をする生徒が増えている。</li> <li>保護者が学校行事への参加が可能になり、学校への理解が深まった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>難しい部分もあるが、トライやるについては、もっと地域の要望を集めるなどして、地域と交流を深める必要があると考える。</li> <li>地域総合センター上ノ島に限らず、地域にはさまざまな子どもの居場所がある。まずは教職員がどんな場所があるのかを知る必要がある。</li> <li>学校からの情報発信を大切にしていく。</li> <li>トライやる、一・ウィークを同じ時期に実施している他の学校が多く、事業所が困っていた。学校間の調整が必要である。</li> </ul>	

<b>4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る</b>		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		3	3
(1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る			
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> <li>1年生の自転車安全教室、避難訓練の実施した。</li> <li>各学期ごとに避難訓練を行い、地震、火災、地震、津波といくつかの災害を想定して、計画的に避難訓練をおこなうことができた。突発的な災害が起きたときの対応が潤滑におこなえるようにしている。災害時の携帯用非常食の配布した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>避難時の特別支援学級の生徒の居場所の把握など、教員間で確認しあうことができた。</li> <li>生徒、教職員と共に、防災・安全意識が高まった。行動が素早くなっている。訓練時の生徒たちの動きが回をこなすことにスムーズになってきた。</li> <li>近隣の幼稚園と合同で1.17避難訓練を実施することで、地域交流を推進できた。</li> <li>いくつかのパターンで行うことで、危機管理能力の向上が図れた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>登下校の不審者の事例は毎年あるので危険個所のマップなどを活用し、生徒保護者に周知し、連絡していく。</li> <li>予告なしの訓練が必要である。慣れになってしまわないような工夫を必要としている。</li> <li>校内の安全点検を行うが、老朽化で修理したくてもできないものがある。教育委員会の協力が必要である。</li> </ul>	

<b>教育目標</b>		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		3	3
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実			
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習で全学年、エナジードを取り入れ、キャリア教育推進を図った。</li> <li>生徒たちが学習に積極的にそして集中して取り組めるようにチャイム前の着席や学習準備をするように教師による声かけをおこなった。</li> <li>生徒会とも連携し、登校時間の校門挨拶の組織化ができた。</li> <li>多くの教職員が休み時間や空き時間にも廊下に立ち生徒との関わる時間を大切にしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒も教職員も共に、世界の様々な問題や現実を知り、そこから自分たちで解決する方法を話し合いの中から考えていくことでコミュニケーション力や発想力、発言力が身につけてきた。</li> <li>チャイムと同時に授業が開始できるようになった。</li> <li>校門での挨拶をすることで他学年の生徒も把握をすることができた。また、他学年の教師と会話することができた。</li> <li>教職員が廊下にいることで、学年の様子が変わる。また、生徒と教師の会話、教師間の会話ができ、情報交換ができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業が単調になりやすい、さらに学力を伸ばせるように生徒たちがより自主的に取り組めるような声かけが必要である。</li> <li>教職員は、生徒にとって、わかりやすい言葉を使用することが必要である。</li> <li>教職員が指導のスキルアップを必要である。その時間をつくるのが課題である。</li> <li>教員が教育目標を実現するにあたり具体的などのような行動が必要か話し合う時間を確保する。</li> </ul>	

<b>研究テーマ</b>		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
		3	3
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実			
取組	成果	課題と改善策	
<ul style="list-style-type: none"> <li>研究授業や指導案を作成し共有した。</li> <li>定期的な教科会を行い、教科ごとの情報交換を行った。</li> <li>授業デザイン3つの視点について、研修を行い、「振り返り」の工夫について全教員が取り組んだ。</li> <li>研究推進を中心としてテーマの達成に向けて授業を工夫しながらおこなっている。研究授業の在り方ややり方を毎年研究推進を中心に改善しながら取り組んでいる。</li> <li>道徳科の研究、公開授業の実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業改善3つの視点を意識した授業づくりを心掛け、特別支援学級の生徒も参加しやすい授業が増えた。</li> <li>研究推進委員会を中心に、教職員が指導案を作成し、振り返りを重点に研究授業を行い授業改善に努めることができた。各教職員が様々な工夫に刺激を受けている。</li> <li>授業デザインを意識した授業を行うことができた。研究討議には、タブレットを用いたことで、意見交流を活発にすることができた。</li> <li>自己の教科外の授業を見る機会になるので学びにつながるが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>給食の実施で、生徒の下校時間が遅くなり、教職員の教材研究をする時間が減少し、時間確保が課題である。</li> <li>形式にとらわれない、教職員の具体的な取り組みの工夫が必要である。研究のための研究授業でなく、生徒の実情に即した内容や指導の仕方、発問の仕方等への応用がこれからは必要になる。</li> <li>研究討議の時間に限界があり、より掘り下げてすることができなかった。</li> <li>研究授業というところでも若手の先生が新しい取り組みを見せる場になりがちだが、ベテラン・中堅も経験を若手に継承していく場にしていく。</li> </ul>	